



人と農と環境をつなぐ技術を考える

世代を超えてタジキスタン国へ

久しぶりに新しい国での技術協力の仕事に従事することになり、今年7月末、中央アジアのタジキスタン国に向かった。中央アジアといえば、古代シルクロードなど東西交易の要衝、オアシスと草原地帯が織りなす歴史世界、南北の農耕民と遊牧民の交流などのイメージがまず頭に浮かぶ。タジキスタンは、イラン系のタジク語を母語とし、国土面積が本州の約3分の2、人口は東京都よりやや少ない約975万人程度の国である。首都ドゥシャンベは、社会主義時代の壮麗な建造物や高木化した街路樹並木が印象的なオアシス都市である。周辺の資源国であるカザフスタン、ウズベキスタンと比較すると、一次産業、ロシアへの出稼ぎ労働に依存する経済小国である。またタジキスタンの国土面積の95%以上は、丘陵・山岳地帯となっており、特に東部域は平均標高5,000m以上のパミール高原が位置している。



ドゥベシヤンの街並み

農業面でみると、高地では相対的に畜産・果樹の比重が高まるが、経済的に重要となるのは西部域の平地・低丘陵での生産である。主要作物



野菜・果物のマーケット

物としては、小麦・綿花などの基幹戦略作物、ジャガイモ・タマネギなどの畑作物、稲作、畜産のほか、リンゴ、モモ、アンズ、ブドウなどの果樹類、トマト、キュウリなど野菜類などが商業ベースで生産・出荷・取引されている。またタジキス

タンの農業は、デフカンという農民の拡大家族グループ（数人～十数人規模）による生産形態に特徴がある。社会主義時代の国営農場（ソフホーズ）、集団農場（コルホーズ）の解体・改革、さらに段階的な小規模化が図られてきているが、デフカンが生産単位となり、協働組合的な農業が行われている。その一方で、これは農民世帯に限らずであるが、タジキスタン国民は政府により自留地と呼ばれる各世帯庭先での自給的食料生産が推奨されている。デフカンの生産作目が国からの地域単位での作付制限の対象となり、しばしば政策割当がみられるのに対し、自留地は、国民の自給用として作物・家畜生産の自由選択が行われている。今回タジキスタンでのプロジェクトは、連邦直轄地や西南部ハトロン州を主要対象地とする。農民の市場志向型農業の導入・活性化、及びその過程でのCP政府職員の能力強化を促進などが主要テーマとなっている。わたしの専門家としての役割としては、デフカン農地での適正なレベルの農家選定と具体的活動の特定になってくるであろうか。



デフガン農地の調査

さて、国際耕種にとっては、タジキスタンはたいへん縁のある国である。JICA 筑波センター（TBIC）の野菜生産関連の研修では、2000年～2002年の国別研修で対象として以来、過去において社員が渡航し、各場面において研修員との交流を深めてきた。今回の出張を機に、さらに社員間世代を超えてのタジキスタン国との交流を深めることができればと考えている。

（2022年10月古賀）